園長通信
（令和７年度７月号）

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長　岡部　祐輝

【遊び中心の保育　VS　設定保育　なのか】

６月後半より、一気に夏日のような日が続き、熱中症リスクなどを配慮する必要性が出る日々となりました。ここ数年、急激な気温上昇や強烈な日差しが差し込む時があるため、子どもたちの活動についても、「保育者の経験や感覚」だけではなく、熱中症アラートやWBGT数値などを把握したうえで、数値的な側面からも、保育活動の在り方を検討する必要があると考えています。

そのような暑い日々となったことで、「泥んこ遊び」や「水遊び」が一年の中でもとくに盛んにおこなわれる時期ともなってきました。子どもも先生も思い切り泥や水を付け、何かに見立てたり、何かになりきってみたり、多様な楽しみ方が見られます。このような戸外（屋外）での遊びは、**「すべての子どもが強制的に行う保育プログラム」**として位置付けているわけではありません。機会や場所、時間は保障しつつ、子どもなりの参加や関与をし、中には手だけ付ける子ども、足だけ付ける子どもなど、参加の仕方は様々であり、様々な参加の仕方や楽しみ方など選択肢を設けることを大切にしています。

このように、近年の幼児教育の中で大切にされている「遊びを中心とした保育」は、「遊んでばかりいるように見える」、「ただその遊びに周囲の大人（保育者）が付き合っているだけに見える」と捉えられている方もおられます。しかし、実際はいま求められている「遊びを中心とした保育」の難易度は保育者に求められる専門性の中でも特に難しいものとされています。

「遊び中心の保育」は、決して「好き勝手させる」「自由放任にする」という意味ではありません。保育者は、子どもたち一人ひとりの発達や興味関心を出発点に、以下のことをふまえ、遊びを考えています。

●子どもは今、何に夢中になっているのか

●子どもたちを夢中にさせているモノ，存在は何か

●子どもの周囲にある環境（玩具/素材/人など）は子どもたちに何を働きかけているか

→アフォーダンス理論という考え方があります

●その遊びは「深める」ことが大切なのか、他者や他の遊びと「つなぐ」ことが大切なのか

●その遊びや環境を活かして子どもに経験してほしい、学んでほしいという保育者の「ねらい」、「ねがい」は何か

●子どものつぶやき、行動、表情など「子ども理解」のまなざしで保育を見る中で、刻々と変化する遊びの様子を見取り、周囲の環境に変化を加える

●保育者が「協力者」、「対戦者」、「提案者」など様々な役割で子どもの遊びに関わり、その世界からの「変化」を支える。（時にこの介入が子どもの遊びに対して影響力が強いと判断した場合は「展開を見守る」という対応をすることもあります）

以上のような視点を保育者が考えながら、「遊びの環境」や「子どもが提案、意見表明をした活動」

を見取り考えています。「子どもの自由な遊びを見取り支える」ということは、上記を見ていただいてもかなり高度であることがわかります。

このような遊び中心の保育と「対立的」、「対比的」に描かれることが多い、「設定保育」ですが、私たちのスタンスとしてこの「設定保育」が「悪い」というスタンスでは考えていません。

「保育にとってよくない」状況は、

●一斉に、強制的に同じことを「させる」活動

●子どもの発達や興味が十分に尊重されないまま進む活動

●大人の計画したレールに沿って保育を進めようとする動き

●指示通り正確に動くことを第一の目標としている活動

●知識や技能の定着に固執しこだわり、進めていく活動

などと考えており、これらは遊び中心の保育であっても、設定保育であっても共通していると考えます。

そもそも設定保育の定義は、様々に解釈されますが、**「保育者のねらいや意図をもとに構成された活動」**と考えられることがあるかと思いますが、このねらい、意図のウエイトが大きすぎると、子どもの興味関心を奪うことがあります。設定保育の中でも子どもの興味関心を反映し、進めていくことは大変重要な要素となりますし、そもそも「子どもの遊び」も「設定保育」となります。

このように書くと、やや混乱を生じる記載となりますが、幼稚園教育要領解説に記載があるように**、「環境を通して行う教育は、幼児の主体性と教師の意図がバランスよく絡み合って成り立つものである」**とあるように、バランス感覚が必要になります。

よって、標題の通り、VS、対立するものではないということをご理解いただければ幸いです。

保育者の意図中心の活動、大人が用意する活動のほうが正直申し上げると、準備も計画も活動実施も「楽」です。教材や素材をあらかじめ用意し、予定した通り進めればいいからです。また、子どもを統制し、座らせて、保育者が指示をし、子ども達全員に同じ作品を作るなどの活動も、ある程度保育者が援助すれば、達成することはできます。残念ながら、そのような見えやすい成果、成果物があることが評価されやすいことがありますが、私たちは人生を生きていく土台となる大切な時期を支える教育を行う機関です。目先の成長、成果だけではなく、あと伸びする力、認知スキルだけではない部分を培える環境やかかわりができるように日々保育者が、懸命にトライしていることが、幼児教育の質の高さであるという評価になっていくことを園長として願っています。

1学期も終わりに差し掛かる７月ですが、子どもたちが出合（会）う環境や人との間で見られる遊びや生活での変化を見守っていきたいと思います。